

6月は、毎年「梅仕事」の季節。

職員のMさんを中心に、梅を干したり漬けたりします。
今年は職員のAさんがたくさん（コンテナに1箱）綺麗な大梅を持ってきてくれました。

梅を見ると自然に上がるテンション。皆さんこぞって串を刺しまくり、「梅ジュース」作りに励みます。利用者Sさんのたつての願いもあり、「梅酒」も二瓶作りました。

その過程で発見された去年漬け込んだ梅酒の瓶。さっそくSさん味見です。

「うーん、美味しい。梅酒はやっぱりロックよね」

「この勢いでカラオケでも一曲どうですか」

桂銀淑似のS子ママを据えて、夜は居酒屋“吾も紅”を開こうかな、など冗談が飛び交います。案外、コロナが落ち着いたら実現するかも…。



他にも6月には嬉しいことがありました。

去年、結婚退職した職員さんが赤ちゃんを連れてきてくれたのです。これがまた、「赤ちゃんのお手本」のような健康的で可愛らしい男の子。皆さん目を細めてあやします。これまで見たこともないであろう老婆たち（失礼！）に抱かれてもニコニコ笑って、泣き顔一つ見せない。さすが福祉の子！



YさんMさん、抱っこして放

しませんでした。子どもや動物は、一瞬でお年寄りの心をわしづかみにします。どんなケアもこれには及びません。幸せなひと時をありがとう。



さて、高齢者のワクチン接種が始まり、皆さんそれぞれ予約して会場へ。ご家族のいないMさんに同行してB病院へ行きました。が…。これが予想以上の珍道中に。

Mさんはかなりの認知症で、加えて喘息持ち（自称）。

吾も紅で、前の瞬間まで元気にトランプして遊んでいたのに、都合が悪くなると急に咳が出、目まで見えなくなって、

「気分が悪い…今日はお風呂に入れません」と断られます。

ワクチン会場でそれが出来たから大変。

（接種後）医師「気分が悪くはありませんか？」

Mさん「気分は悪いです…目が見えない…白い煙が（ゴホゴホ）」

医師「ええっ?!大丈夫ですか?!」

Mさん「大丈夫じゃありません。私はひどい喘息もちだし、アレルギーもあって」

私「あの～、大丈夫だと思います」

医師「一応、30分は様子を見ましょう」

そんなやり取りの後、普通は15分で帰れるところが30分病院で待機することに。

Mさん「いつまで待たせるの?!なんで私はここに連れてこられたの?私が何をしたっていうの…こんなところに…恐ろしい…ここはどこ?」

私「B病院ですよ、予防接種に来たんです」

Mさん「なんですぐに帰してくれないの?!私は何ともないのに」

私「…。(あなたが気分が悪いと言ったからですよ:心の声)」

この問答が数秒ごとに繰り返され、ようやく長い30分が過ぎて放免されました。

ちなみに、Mさんは帰りの車の中でも

「一体私が何をしたっていうの…どうしてこんな目に合うの…Nちゃん(死んだ息子の名前)早く迎えに来て。お母さんは正直に生きてきたのに。あんなひどいことをされて」

とつぶやきっぱなしでした。どうやら、警察に連れていかれたことになっていたようです。

高齢者のワクチン接種は、別の意味でも大変な出来事です。やれやれ。

